



「KOMABA DAY」は月に一度実施している日で、世界で起こっている様々な問題に子どもたちが触れる機会を作っています。また、同日は募金箱も設置します。集まった募金は災害などの緊急支援や KOMABA の開校以来、その活動を応援し続けているトータルペインター・ミヤザキ ケンスケさんのプロジェクト OVER THE WALL に役立てられます。なお楽しみながらの活動を目指しているため、「KOMABA DAY」では講師は私服で授業をし、生徒は授業中の飲食を可としています。

ガザ危機 「子どものパンもない」

せめて水やパンなど最低限でも支援が届くようにしてほしい



イスラエルが攻撃するパレスチナ自治区ガザの窮状を、現地と交流を重ねてきた日本人たちが訴えている。「子どもに与えるパンもない」「1日1食が精いっぱい」。イスラム組織ハマスとイスラエルの軍事衝突から7日で1カ月。死傷者数が日々増える中、民間人の犠牲がこれ以上拡大しないよう祈る。

「ガザは地獄のような状態。1秒でも早く戦闘を止めて」。ガザで医療や子育て支援に携わる非政府組織(NGO)、日本国際ボランティアセンターの大澤みずほさん(39)は祈る思いで情勢を注視する。エルサレムに身を置き、ガザの知人と SNS などでメッセージをやり取りして情報収集を続ける。

ともに支援活動にあたってきた30代のパレスチナ人女性は、空爆で20人以上の親族を失った。子ども5人と避難した南部でも空爆が続いており、大澤さんが受け取ったメッセージには「翌朝生きて目覚めることだけを願っている」との言葉がつづられていた。

国連人道問題調整事務所(OCHA)によると、人口約220万人のうち150万人が避難生活を送っている。11月6日時点で稼働するパン屋は9カ所だけ。平時の半分の量のパンを入手するため4~6時間待ちの列ができているという。

[2023/11/7] 日本経済新聞



攻撃で破壊された建物で捜索にあたる男性(ガザ南部)



ガザで医療・子育て支援をしてきた大澤さん

小学生の子どもたちから「せんそう」という言葉が授業中や休み時間によく耳に入ってくるようになりました。今起きていることを理解するには(そもそも我々にも理解はできていませんが)まだ幼い子どもが何気なく口にする場合もあれば、高学年の子どもから直近のニュースについて心配する声として聞かれることもあります。子どもたちにとって、戦争はいつもの間にか過去の歴史として習うものではなく、今起きていることとして「あたり前」の言葉になってしまったのかもしれない。

2022年のロシアのウクライナ侵攻以来、戦争により人が犠牲になることに麻痺を失っている気がします。自然災害ではなく、人為災害によって「パンも食べることができない子どもたち」がいることは、決して「あたり前」ではないことを、強く生徒たちに伝えていきます。

(石川)